

「殺生石」物語考

物語の概略⑦

斑足太子の耶羯国に、耆婆という名医がいた。ある時、病に伏した華陽夫人の脈を診て、人間のものではない、野狐の類だと、太子に言上する。太子は激怒し、華陽夫人にそれを伝える。華陽は内心大いに驚くが、涙を見せて悔しがりながら、これは、自分に恋い焦がれる彼の意趣晴らしだと太子に訴える。なお、彼からの艶書を取っておかなかつたことを、後悔して見せる。華陽は、耆婆を誅戮しようとする太子を思い留ませ、自分が耆婆と問答し、理非を明白にしたいと言おう。

からである。又、医学論争においても、華陽は、耆婆の問う難題を悉く答え、反対に、華陽の問う問題に、耆婆は答えることが出来なかつた。

斑足太子をはじめ諸臣は、華陽の博識・多才に感じ入らない者はなかつた。華陽は、耆婆を論じ伏せると、自分の脈を畜類だという、その不屈きを知れと、叱責する。耆婆は、重罪人として家に送られる。

耆婆は、家にあつて、十七日間沐浴潔斎し、昼夜、摩竭国の天神の廟を遙拝した。すると、満願の夜夢枕に天神が立ち、一千里彼方の金鳳山に薬王樹を求めむべしと告げる。この木こそ、変化の物を退けるものだと教える。

華陽と対面する。

華陽夫人

しかし、全く身に覚えのない艶書のこと、華陽の思いがけない詭弁によつて、耆婆は面目を失う。華陽の美貌を目の当たりにした宮廷人が皆、それもあり得ると肯いた



筆者 前那須歴史探訪館 館長

齊藤 宏壽 先生(湯本在住)

今月のひとこと

列島にまた暑い夏が来て
不戦を誓う各地の行事

かつこう

畑で採れたトマトが実家の食卓にあがる。適当に切られた冷たいトマトの上にかけられるのはたつぷりの白砂糖。物心ついた時からトマトには砂糖がかかっている、トマトはそうして食べるものだと思つて育つた。今でもそれが自分にとつては一番おいしい食べ方で、どうしても譲れない季節は立秋。涼風至とはいえ、

今後も厳しい残暑が続くそうなる予想だ。町では、熱中症による救急搬送者数が増えていることから、防災無線による注意喚起を行っている。気温が33℃を越えた時点で、屋外活動の自粛などの熱中症対策について呼びかける▼統計開始以降最も早い梅雨明けや逆走する台風など、前例にない気象状況が続いている。過去の常識は現在に通用しないといわれている中、「自分は大丈夫」と思い込まずに、意識を変

えることが必要ではないだろうか。防災無線が聞こえてきたら、屋外での作業時はこまめに休憩する。喉が渴いていなくても水分を摂る。エアコンをつける。生活の中で、何か一つの意識付けとして役立ててほしい▼熱中症予防には水分と塩分の補給が欠かせない。トマトに塩…これまではおいそれとかける気にならなかつたが、必要なのは意識を変えらる。猛暑の夏には、塩味のトマトも食べることにしよう。

こんにちは 赤ちゃん



土田
あおい
青生くん
(西町)

平成 28年
6月11日生

父 康晃さん 母 早紀さん

青生くんは…

お庭を元気いっぱい駆け回っています
働く車と新幹線が大好きです

「こんにちは赤ちゃん」コーナーの写真を随時募集しています。
詳しくは総務課広報広聴係(☎72-6901)まで。

町の世帯と人口

(7月1日現在・住民基本台帳)
()の数字は前月比

- ・世帯数 10,279世帯(+16)
- ・人口 25,397人(-1)
- 男 12,605人(+8) 女 12,792人(-9)

あなたの「声」を聞かせてください

地域の身近な情報や、広報「那須」の感想・ご意見をお待ちしています。
お名前と連絡先とともに下記までお寄せください。